

平和の鐘

令和七年 夏号
あべの観音だより

無憂山 法観寺

「知覧特攻平和会館」
令和6年9月5日撮影 住職

あべの観音だより

大暑

あべの観音 無憂山 法観寺
 大阪府阿倍野区阪南町三十一・一十七
 電話 〇六（七五〇九）三八〇六
 発行著者 住職 法源 拝具



何のために己を断って

魂だけが帰り来るの…

時は一九四五年（昭和二〇年八月）

に日本は終戦を迎えましたが、戦争のない時期はほとんどないと言ってよいくらい現在も世界各地では惨禍・惨苦・惨憺な戦争・紛争が起こっています。

本年、日本では第二次世界大戦の終戦から八〇年という節目を機会に改めて“いのちの在り方”を問い直さなければならぬ時期であるとして深く考えています。タイトルの「何のために己を断って、魂だけが帰り来るの…」と述べました。こちらは

作家・百田尚樹氏（一九五六一）年の『永遠の0』という特攻隊の通称ゼロ戦という零戦（零式艦上戦闘機）乗りの話を同名として映画化された際に音楽グループのサザンオールスターズ氏が主題歌を手がけた『螢』の歌詞から引用したものです。若くして「お国のために往つてきます。」と笑顔でサヨナラを家族たちに告げ、涙を見せぬように寿命をまっとうせずして特攻して逝った隊員たちを思うと言葉になりません。

死者たちだけが戦争の終わりを見た。豊かな時代を迎えた今、現代人たちは、その意思や思いを引き取り、大切なことを汲み取れているのか？

これは日本国に限らず、世界どの国々の戦争や争いは時間が経てばやがて人はなぜにあの時、そんな思いにまで駆られ戦争をしなければならぬのかと虚無感の報酬が胸中に宿ります。

戦争は資源の確保、領地の拡大が戦争の要因でもあります。表向きは「生活圏の確保」という名目でもあります。

それは人間のもつ一定の境界線を越えた「欲望」から起こる不要である邪念の尊厳が悪循環を起こし（余計なプライド）、人々の争いが増幅していきます。いわゆる「油に火を注ぐ」ことであり、止まるところか欲は加速していくばかりなのです。

人間の欲は欲を作り 果てることがない。

現代は模範（見本）になる大人が少なかった時代でもあります。心を律し、模範となれるような人物、また憧れを抱きたいと思えるような人が少なくなりました。新聞やテレビから流れてくる情報は大人が恥ずかしいというような記事が際立ちます。懸命に羞恥を隠蔽しようと言い訳をするような大人が増えているのが目の当たりです。かえって羞恥を重ねているように思えます。

潔さが欠如している

それは仏教で説く無明（迷い・無知）という判断力と決断力に自信が持てないほど情報があふれた社会だ

からこそ“迷い”だらけであり、どれを信じて、何を信念として生きていく指標（道しるべ）がないのです。

情報とは時代のアンテナみたいなものでありますが、誰もが発信できる時代でもあることから興味あることに人は自然に惹かれていきます。

安逸な道では大切なものは見えづらく、苦難な道を選択することこそ大切なことを見出せるのです。

いわゆる損得で判断するのではなく、正しいか正しくないかの判断力の心を育てなくてはならないのです。

知識は必要でもあります、しかし知識だけでは身も世の中も助けてくれないことが現実で、やはり育て

なければならぬのが大切なことを知ることが智慧なのです。

知恵は能作用、智慧は心作用です。

仏教では「智慧」を優先します。

お題の「何のために己を断つて、魂だけが帰り来るの…」の思いには、戦争の世界観に寄り添いながらも、身近な人に先立たれ失意の人、戦争に限らず寿命をまっとうせずして大切な人を亡くした心情にも通ずる、普遍的な平和への祈り歌（詩）です。今わたしたちは改めて、日々の平和ボケした何気ない日常の中にある生活に反省し、先人に感謝し、今ある命をどのように生かしていくことが肝要であるのかを考え直す必要が求められています。

幸せとは手にするものでなく
幸せとを感じる心を手にいれること

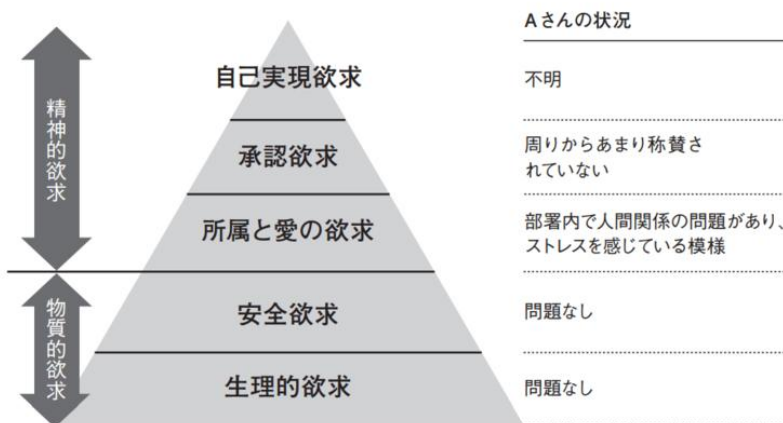
仏教では正しく生きる道しるべを
教示しますが、その中でも「正命
(梵・samyag-ājiva)」があります。
正命は殺生などに基づく、道徳に反
する職業や仕事はせず、正当な生業
を持って生きていくことであり、単
なる命というよりも、生計(平穩に
暮らす手段)としての生き方であり
ます。

日々正しい生き方・あり方が含ま
れる“正しい生活をする^{しょうみょう}こと”を
意義するのが正命^{しょうみょう}なのです。

必要以上のものを保有^{こゆう}しない心^{こころ}がけ

人間の欲は尽きることはなく。求
めなくても煩惱から欲望が次々と湧
いてきます。「こうしたい。」「こ
うであって欲しい。」「こうでなく
てはならない。」など、数え切れな

図表33-2 マズローの欲求5段階説分析例



図：ダイヤモンド・オンラインより引用

いほどに欲が心の底から湧いてくる
のです。
人間性心理学の最も重要な生みの
親とも呼称されるアブラハム・マズ
ロー(一九〇八～一九七〇)心理学
の権威ともいえる方は人間の欲を左
記のように表わしました。

上の図は、マズローの研究結果からも
たらされた人間性心理学を五段階に分析
したのですが、「自己実現欲求」こそ
心理学者マズローは、最高位の欲として
います。仏教でも同じことです。それぞ
れ僧侶が願う自己実現欲求は世の中を
平和にする欲求(利他欲)です。

「五大願」

- 一、衆生無辺誓願度^{しゅじょうむへんせいがんど}
- 二、福知無辺誓願集^{ふくちむへんせいがんしゅう}
- 三、法門無辺誓願学^{ほうちんむへんせいがんがく}
- 四、如来無辺誓願事^{にょらいむへんせいがんじ}
- 五、菩提無上誓願証^{ぼだいむじょうせいがんしょう}

※省略しますと、五大願は菩薩(修行
者)が仏道を求めるとき最初に立てた五
つの誓い。菩薩が普遍的に追求すべきも
のであるとされ、総願とも呼ばれます。

川は知っている。

急がなくてもいい。

いつかそこに着けるから。

自己実現に向けて「こうでなければならぬ・もしかすると叶わない。」という予測の不安から、人は強行的に戦争など武力行使をもつて制圧し、解決を図ろうとする自利欲^{じりよく}が人びとを平和から遠ざけています。

一度こころに負った傷跡は消えるものでなく、心の傷と共に生きていくことはとても辛いことで、心に春というおだやかな日常が戻ることは容易^{たやす}いものではありません。

行きつくところは皆同じ

大きな成功を求めるより、目先の人々に目を向けることこそが、人びとから国をも救うことへつながっていきます。

「急^せいては事を仕損^{しそん}じる」とあるように目先の利益という“欲”に奪われることより大切な人びとにも支配者・制圧者は同じ人間の心、ひとつの命があることを忘れないで欲しい。

知っていますか？戦争では日本人だからといって日本のために戦うことはありませんでした。一例ではハワイなどへ移住していた日本人などはその国の軍として兵役していました。人びとは時代の欲の犠牲者（巻き添え）なのです。

各々の国は戦争に勝てば、生活が楽になるという理想を描いていたことでしよう。この戦争という苦しい壁を超えると真の安楽が訪れるなど、希望を戦前は思っていたことと感じます。しかし苦しいことに挑まなくていい。譲る心を育てることが優先となります。

釈迦は苦行の果てには「無益^{むえき}である」と説いています。それは生きること自体

が釈迦は苦行（一切皆苦^{いっさいかいく}）だと説いたのです。仏教ではだからこそ何ごとにおいても“ほどほど”を真髓^{しんずい}（肝心要^{かなめ}）としています。思考も行動もすべてにおいてです。

幸せや不幸には実態は無い

宝石やお金など物質は目に見えますが、「幸せ」や「不幸」などには実態はなく、それは感受という心が感じているに過ぎないことで、心はどこにもない無なのです。失敗を失敗と捉えれば自信を無くしていき、後悔を後悔のままにしておけば重たい石を足に付けられている足枷^{あしかせ}のようなものです。「失敗」は経験ととらえる思考、「後悔」は先に立たないの今を切に生きる心が肝要です。

反省する人は、 伸びるスピードが違う

仏教では傲慢ごうまんになつてはならないことを強く示唆し、それを「増上慢ぞうじょうまん」と称し、「いまだ悟りさとを得てもいないのに、悟つたとして思い昂たかぶるぶること」を意味します。

傲慢ごうまんは人間の成長にブレーキをかけ、やがて後退（衰退）させていきます。大人になれば、精神も多少の経験より自立していることから指摘（叱ちつてくれる環境）してくれる人も少なくなっていくので自分自身で気づいていかなければならないのです。

傲慢な態度は強さではなく、弱さのしるしを他人にアピールしていることなのです。

ことわざに「己おのれを反かえりみる者は、事に触ふれて皆薬石やくせきとなり」とあるように、“失敗は成功のもと”とよく耳にします。しかし実際に成功を感じた人たちは、失

敗かえりを省かえりみて、その失敗を肥こやしという糧かて（活力）として成功への成長をされた方です。ただ失敗を重ねれば成長していくわけではありません。よく「何とかなる」と困ったときに見聞する言葉も、努力してきた人だけに“何とかなる”ということです。何の努力もせずしては何かを得れることや、どうにかなることはありません。

失敗を薬と思うこと

良薬は口に苦くちしにがなのである。

失敗から学んだことを復習して、初めて成功の入り口が見え始めます。失敗の原因は何だったのか、どんな行動をすれば未然に防未然ぐことができたのか。それを深掘りした考えが自分の力ちからに変えていくことができるのです。反省がなければ、進歩もなく、また同じことを繰り返して

しまいます。行動を振り返り、失敗や経験をしっかりと心身の糧かて（活力）にする人だけが成長を続けられるのです。いわば「温故知新おんこちしん」です。世の中すべての時代も過去を振り返るからこそ、新しい時代を切り開くことができているのです。

失敗に無縁の人ほど挫折に弱い

先に申しました幸せや不幸には実態じったいはないと記しました。また同じように、成功や失敗にも実態は無いのです。それは自分の心がどう感じるかだけです。

挑戦する人には失敗の数が増えていく。また経験も増え、心の智慧ちえは豊かさを増していきます。いわゆる他人の気持ちに寄り添える人になる慈悲じひなのです。

慈悲とはよく仏教では使用する言葉です。普遍的には“おもいやり”“やさしさ”などと思うことが常ですが、ま

だその奥にある利他という他人へ利益を与えること、それは「相手の苦しみを取り除き、楽を与えるという抜苦与楽」こそが「慈悲」なのです。

私は他人様の喜びこそが利益と思うのです。それを随喜功德と称します。

今回の「観音だより」では日本国が戦後八十年を迎えるとともに、もう一度いのちのあり方を考える記事にいたしました。それは日本だけの話しをしているのではなく、国籍なんて関係ありません。世界でも起こり、終戦を迎え、戦死した命を尊ぶためです。

魂はお盆に帰ってくるのです。

一年一度の里帰り

褒美を準備してお迎えのころ

わたしは昨年の九月に鹿児島にある知覧特攻平和会館へ参拝してきました。



それは「いのち」を直視し、当時を憶えているかのように感じ、胸を締め付ける中で平和記念会館を巡りました。あの不思議な感覚はいまなお心に残っています。

それは他国を恨むなどの気持ちなどではなく、人は何のために生まれてきたのか。特攻隊員たちは時代の犠牲者であり、人の誕生は時代を選んで生まれてくることはできず、欲により駒のように命を軽んじて人を扱うことに憤りを感じます。

わたしの性格を平易に述べておきますと、いたって簡単にイジめる人をイジめるような気質を持ち合わせています。それは自利欲（自分勝手）の人を制御し、正路に戻してあげるためだけです。

必ず死ぬ特攻、それは『必死』

最後の戦いとなった沖縄戦では特攻隊として旅立った戦闘員の数は全国すべてに樺太ならび朝鮮を足した四十九もの国都道府県から沖縄の戦地へと飛び出したのです。

特攻作戦は、重さ二五〇kgの爆弾を装着した戦闘機で敵の艦船に体当たりして沈める、パイロットは「必ず死ぬ」という「必死」条件の作戦でした。特攻隊員は17歳から32歳の平均年齢21〜22歳です。それは、現代なら高校生から大学生の若者が未来を見ずして「お国のため」「家族の未来に希望を照らすため」と称しながら多くの必死の作戦を実行されたのです。それは皆、「必死」では、数ある実際の特攻隊員として旅立った御方が家族に書いたことを現代訳で一部を紹介させていただきます。

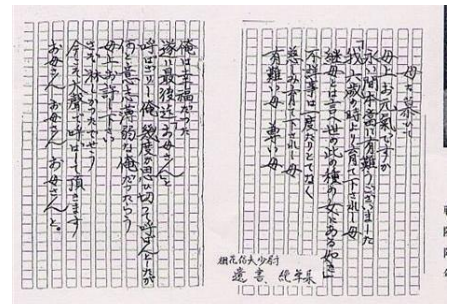
遺書「母を慕^{した}いて」

母上お元気ですか 永い間
本当に有難うございました。
母の温もりが欲しい時期に母
はいなく、六歳の時より家庭
に入って愛情をもって下さっ
た継母とはいえ、恥ずかしさ
から素直に甘えることもでき
ず、慈しみ育て下されし母、
有難い母、尊い母、俺は幸福
でした。
遂に最後まで“お母さん”と
呼ぶことができませんでした。
何度か思い切って呼ぼうとし
ましたが何と意思薄弱な俺だ
ったろう…母上お許し下さい。
さぞ淋しかったでしょう。
今こそ大声で呼ばして頂きま
す。
「お母さん」、「お母さん」、
「お母さん」と。



相花 信夫（宮城県）
戦死日 昭和20年5月4日
隊名 第77振武隊
階級 少尉
年齢 18歳

宮城県出身の
相花信夫少尉は、
少年飛行兵として
1945年5月4日に
出撃し18歳で戦
死



六歳の頃から育ててくれた継母に対す
る思いを綴った手紙。十死零生（^{じっしれいせい}生きる
望みはゼロ、死を覚悟で敵に体当たりす
る究極の攻撃「特攻」）にして、宮城県
出身・相花信夫少尉（昭和20年5月4日
出撃）享年十八歳（神風特別攻撃隊第五
神剣隊）の精一杯の母親への謝意です。

人口の推移（戦時中と現在）

第二次世界大戦だけを見ると世界の死
者数は約4千万人です。当時世界人口は
約二十億人、日本人口は約七千万人。
現在、世界では約八十億人、日本人口
は約一億二千万人です。



女学生の見送りを受け出撃する特攻機。この場
に桑代チノさんも居合わせた。

撮影：早川弘 氏

左記の写真は有名な神風特攻隊を見送
る家族、親類縁者の人びとたちです。心
の中は涙でいっぱいであったこと、でも
表情は笑顔で旅行でも出掛けるかのよう
に見送る。「決死」「必死」二度と会う
ことのできないことは分かって送り出す
ことは、この写真に居る当時学生だった
特攻隊員の世話をしていた桑代チノさん
（96歳）は「美談になどしてほしくない、
ただの悲劇でした。」と…

最後にもう一通、回天特攻隊（人間魚雷）の氏名不明、享年十八歳の遺書をご紹介させていただきます。

「死より怖いものは母の涙」

お母さん、私は後三時間で祖国のために散っていきます。胸は晴れやかな気持ちです。本当ですよお母さん。少しも怖くない。

しかしね、時間があったので考えてみましたら、少し寂しくなってきました。

それは、今日私が戦死した通知が届く。お父さんは男だから分かっていただけだと思いますが、お母さんは女だから、優しいから、涙が出るのでありませんか。弟や妹たちも兄ちゃんが生んだといって寂しく思うでしょうね。お母さん。こんなことを考え

てみましたら、私も人の子。やはり寂しい。しかしお母さん。考えて見てください。今日私が特攻隊で行かなければどうなると思いますか。戦争はこの日本本土まで迫って、この世の中で一番好きだった母さんが死なれるから私が行くのですよ。お母さん。今日私が特攻隊で行かなければ、年をとられたお父さんまで、銃をとるようになりますよ。

だからお母さん。今日私が戦死したからといって、どうか涙だけは耐えてください。でもやっぱりだめだろうな。お母さんは優しい人だから。お母さん、私はどんな敵だって怖くはありません

「私が一番怖いのは、お母さんの涙です。」

回天という人間魚雷の操縦は例えて言えば真つ暗な道をヘッドライトをつけず車を操縦するようなものです。

それをわずか高校生くらいの子どもが国家の運命を背負うというプレッシャーを背負って戦っていました。

恨み憎しみ不平不満などそのような想いが綴られた遺書は一つもありません。

みんなただ最後の最期、覚悟をもった人の思いには感謝に溢れていました。

そして必ずこの国を守り愛するものを守ろうという決死の覚悟だけが胸いっぱい広がっていたのです。

今を生きる私たちが自分さえ良ければいい。未来のことなんてどうでもいい。

今が楽しければそれでいい。国のことも世の中のことも自分には関係ない。そんな思いで生きていたらわずか八十年前すべてを捨ててこの国を守ってくださった先人の方々にあまりにも失礼ではないでしょうか。

合掌

回天搭乗員で奇跡的に生き残った竹林たけはやし

博ひろし氏はこう語っています。（大正14年生まれ）

学校で教えないから今の学生は戦争の悲惨ひさんさや当時のことを知らなすぎる。

戦友たちは何の為に命を捧げたのかを是非とも今の若者に理解して欲しい。

最近自殺が多い。価値ある死を選んだ者から見ると簡単に死を選ぶのをはやめてほしい。我々には理解できないんです。

今の日本人にもまず世のため、人のために役に立つんだという気持ちが欲しい。

真実はねじ曲げられ日本人は誇りを失ってしまいました。日本は侵略しんりやくなんてしていません。世界の平和のために戦いました。その立派な先人たちの功労を私たちは正しく知るべきです。

私たちが生きている今は彼らが命がけで守ってくれた未来です。改めて私たちが“いのち”を考える時間を忙せわししない日々の中に少しでもいい。考えて欲しい。

「志を引き取ることも供養」

たった一度の人生を捧げて

さらば家族よ　さらば友よ　さらばこの世

涙みせぬように　笑顔でサヨナラを告げる

大切な人を守るために

前線に赴く覚悟　時代の犠牲者よ

人間はなんて愚かな生きものよ

「魂」だけが帰ってくるとは

とても悲しく　とても辛い

無数の戦いに捧げた　全世界の人類

あなたたちが捧げた　尊い命

今わたしたちは　幸せになってやる



令和七年度

盂蘭盆会(お盆・先祖供養)

施餓鬼法要を行いましょう。



8月12日(火) 17時開式



法観寺 併 法真寺

初合同 盂蘭盆会大法要